

第3種郵便物認可

幸福の赤いサクランボ



昨年9月、国文学研究者を目指す私の長男が、たくさんの方々の祝福を受け、山形で結婚式を挙げた。

相手は大学院の同じ学科の後輩で、長男と同じ研究者を目指す横須賀育ちのお嬢さんだった。

今年31歳になる長男は、私が就農した1996年の春、12歳で横浜の中高一貫の私立校に入り、大学大学院共に東京で学び、現在も東京で暮らしている。

私は就農してからこれまで、2人の子供たちが努力する姿を仕事の糧として過ぎしてきた、と言っても過言ではないと思っています。

入社希望の若者が来た

そんな長男の結婚式の準備を進めていた昨年8月、ハローワークの紹介状と東北大学のロゴマーク

入りの履歴書を持った安食政史君が、入社希望の面接のために私のところに来た。

履歴書を見ると「2014年3

月、東北大学大学院農学研究科修了予定」とあった。私は驚いて「今、募集しているのは、即現場で働いてくれる人なのですが、来春、新卒で当農園に本気で就職しようと考えているのですか。仕事の内容は農作業全般と農業土木。1年を通して8割以上は、屋外の仕事になります。それでもいいですか」と尋ねた。半分キツネに

つままれたような気持ちと、望んでいた人材が応募してきたという

多田さんの師匠、鈴木仁さんから剪定の基本について指導を受ける安食政史君(左)



多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、1・7畝のサクランボ園を経営する。

期待感を持って対応していた。

それに答えて安食君は、「僕は学部生の頃から農業がしたいと考えていました。将来伸びがあると考える多田農園で、自分の能力を生かして働きたいと思います」と真摯な口調で話してくれた。

私はそれから3カ月間考え、安食君を4月から採用することに決め、11月に内定書を出した。

その時は子供たちが幼い頃、企業家だった妻の父が口癖のように語っていた「人は真面目に努力すればなりたいたものに何にでもなれる。人生、念ずれば通ずるだよ」という言葉を改めて思い出した。